

中世に於ける西山派教団

——本山義教団の変遷——

田 辺 隆 邦

(西山短期大学)

序

西山派教団が過去に六派あったことは(1)周知のことであるが、派祖證空善恵房が寂した宝治元年(一二四七)十一月廿六日の時点に於ては、孔門の顔回にも比された證空の上足の弟子である東山義の義祖、觀鏡房證入(2)は已に二年前の寛元三年に寂していたが(3)この證入にはかなり多数の門弟があり、京洛東山の宮述子を拠点として教線を張っており、嵯峨義の義祖、道觀房證恵は時の聖主、後嵯峨天皇の帰依を得て古刹嵯峨檀林寺の趾に建立された浄金剛院の開山第一に推挙されて西山教義中の事相法門とされている觀經曼荼羅の講説については宮廷公家社会に広く受容され(4)この浄金剛院を中心として数代は碩学の高僧が師資相承されていて、義祖より曾孫の弟子、尊空本道は鎌倉時代末期には浄金剛院の境内に觀經曼荼羅を本尊とする「曼荼羅堂」もあって花園天皇はたびたび参詣している(5)。深草義の義祖円空立信は洛南深草の地に「真宗院」を建立したが、弟子に道教顕意なる逸材を得て京洛の地に西山教

義を宣布しその末裔は大和の地に更に三河へ迄教線を張るのである。

西谷義は浄音を義祖とするが、孫弟子に武州鶉ノ木の宝幢院に行観覚融なる法器を得て、その著いわゆる「行観の私記」と平生言っている「四帖疏秘鈔二十卷」はその後の西谷義教団発展の基盤ともなり今日あらしめたものである。

六角義又は八幡義と称された了音は西谷義祖浄音の弟子で「了音鈔（六角鈔）」が西山全書に納められている。この系統は美濃に「立政寺」として現存しているが、現在では西谷義教団に没入している。

本山義は派祖證空の廟所である三鈔寺を拠点として、南北朝時代に康空示導を義祖として発展していく教団であるが、六派中一番後世に現出した西山教団で、戦前は天台宗教団に所属し室町時代末期に西山から離れて行った教団である。

当小論はこの本山義教団を中心として中世にあった西山教団のありし姿を考えてみることを目的とした。

因に現在の西山教団は深草義と西谷義とのみが現存し嵯峨義は後に本山義に、東山義は深草に、六角義は西谷義に没入したようである。

(1) 西山六派

1. 東山義―観鏡房証入―東山、宮ノ辻子
2. 嵯峨義―道観房証恵―嵯峨、浄金剛院
3. 深草義―円空、立信―深草、真宗院、現在―京極誓願寺
4. 西谷義―法興、浄音仁和寺の西谷、現在―粟生光明寺、東山の禅林寺
5. 六角義（八幡義）―了音

6. 本山義——康空示導上人広恵和尚——西山三鉢寺

(2) 浄土源流章に

証空上足、有証入者、如孔門有顔回。深得師意。

(3) 法水分流記

(4) 平戸記 寛元三年正月廿六日に

以道観上人啓白、其次令解当麻曼陀羅とある。道観には自著「当麻曼陀羅縁起」一卷があり、道観自筆本が禅林寺に現存せられている。

(5) 花園宸記、元応元年九月十八日、召本道上人、談念仏宗法文、元亨二年十月十日、此日幸椎野(中略)礼曼荼羅堂

(下略)嵯峨の椎野に浄金剛院があつて當時は尊空本道が住していた。

一 本山義の開祖

本山義教団は西山六派中一番遅れて出現したがその開祖について西山では往昔から諸説があつたようである。

杉紫朗博士が「西鎮教義概論」(一五七頁)の中で

本山義の祖に於て世に異論がないでもない。それは派祖の直弟で示導已前に三鉢寺の世代となつた栖空遊観を以て擬し、又実導を以て擬する人があつた(下略)

とあつて、示導、栖空遊観、実導の三人を本山義祖に當てようとの三説があつたようである。法水分流記の中に

證空——遊観栖空住西山北尾

とあり、浄土伝灯総系譜に

遊観号栖空
住三鉢寺永仁六年四月十七日寂

中世に於ける西山派教団(田辺隆邦)

とあって寂時も記されてあるが、この遊観には著書も見当らず義祖としての行跡もないが系図の上からは義祖とも考えられるので、義祖とする一説が西山ではあったようである(1)。尚、「円頓戒」の系譜については重要な位置に栖空遊観はあるので、その立場からは義祖として考えられる価値はある(2)。

仁空実導には著書が多いがその師、康空示導の説を筆録しているので、西山では示導を以て義祖として来た。読史備要には(九六二頁)

證空—遊観—玄観—示導—実導—照恵—示鏡—中統—恵篤

と本山義の系統が記されているが三鉢寺伝持次第には

善恵—静證—立信—遊観—示導—示浄—実導—照恵—示鏡—中統—恵篤—寿尚—寿観

とあって玄観は三鉢寺の世代から脱かれていますのである。示導の実名は「康空示導上人広恵和尚」と称した(3)。

元来天台の僧であり、京洛猪熊の盧山寺の中興本光禅仙の室に入って頭密の修学をしたが浄土門へと志向して行って当時武家文化の中心地である鎌倉には西山派の寺が、かなりあって(4)、その一つが弁ヶ谷の仏観の住した寺で、此所で数年西山義の研究をしたがこの仏観は(5)、「西山上人縁起」によると著者仁空実導は観明の弟子だと言っているので自分の師僧のことだからこの説を取ると

証空—東山義祖
観鏡証入—観明—仏観

となり東山義系統の僧であったが、後には嵯峨義の拠点浄金剛院二世禅空覚道の義を示導に師授したので、師仏観の説には納得しがたくて、證入の筆録にかかるといわれている証空の教相の著である「観経疏他筆鈔」を仏観が所持しているのを借用して研讀に勉めたようである。この後数年を経て鎌倉を後にして西山三鉢寺に移った示導は此所で

証空の著である自筆鈔と称せられる「観門要義鈔」や宇都宮蓮生の著である「積学房抄」と出逢うのである。当時三鈔寺には証空の著書が未だ数多く残されていたと思われ、示導は渉獵して研究したようである。

この時の三鈔寺の住持職は承空玄観であったが教義方面には精通してないので示導は鎌倉の仏観の所と同じように証空の古鈔の研究に没頭したのである(6)。

この承空玄観は 蓮門宗派には

西山第五長老 学頭

とか又は

西山長老次第、自天台座主慈鎮和尚、付属于証空上人地也

善惠上人、^一淨照上人、^二尊体上人、^三立信上人、^四勇観上人、^五玄観上人、^六

とあって、西山長老第五、又は第六に見立てられたりした所があるが、西山三鈔寺伝持次第には玄観は記述されてなくて、栖空遊観の次ぎに康空示導が記されているのである。これは前述のような教義方面の問題から実導は玄観を認めなかった現われであると思われる。然しこの承空玄観は、諸私家集をはじめ歌合せを西山三鈔寺で書写して現在の吾等に伝えてくれた文化史上歌道の方面では大きな功蹟を残してくれた僧で、その意味では偉大な人物であった(7)。

そしてこの玄観は宇都宮弥三郎頼綱即ち実信房蓮生の孫らしいので、蓮生と初期西山教団との関係から類推するとこの玄観が三鈔寺に住することは妥当なことなのである。

三鈔寺で証空の古鈔を学習している示導は僧衆の尊敬を得て師僧玄観をしのぐ程の学識を得たので遠慮して洛北の雲林院へ去るのである(8)。雲林院は平安朝初期に仁明天皇の皇子常康親王(雲林院宮)から僧正遍照が附属せられて

寺として雲林院と称した寺で、この常康親王の子が「空也」だと「皇胤紹運録」にあって、天台宗の由緒寺院であるが、この示導の移った当時は雲林院の頭塔寺院に「念仏寺」なるものがあるから(9)天台念仏の不断念仏が施行せられていたので示導は移ったと思われる。此所に住すること数年更に大原の「来迎院」へ移るのである。この時後醍醐天皇の綸旨で入寺したようである。三鈷寺伝持次第には

後醍醐院国師後醍醐御宇元亨癸亥八月入院とあるし、西山上人縁起にも

嘉暦のころにや天子御受戒の儀ありけり

とあるので後醍醐天皇との関係があったようである。三年程来迎院にいた所が承空玄観が元亨三年になくなったので僧衆の招きに応じて三鈷寺に住した(10)。

示導の著書としては観經疏康永抄（西山全書所収）が残されているが、これは南北朝の初期後村上天皇の康永元年七月から康永四年七月迄、毎年七月の夏安居に京洛大慈恩寺（又は慈恩寺）で観經の玄義分、序分義、定善義、散善義と毎年講談されたのを弟子の仁空実導が筆録したものであるが、西山本山義の教義を鮮明に知ることが出来る著述である。

本山義の特色は円密戒淨の四宗兼学であって天台真言円戒淨土の学修の上に専修念仏を立てるのである。これは開祖証空の行実の中にもあった姿で(11)あって、現在の西山でも「聖淨両実」と釈迦教の立場から聖道門を認めるのである。実隆公記の永正三年六月廿八日に

先公月忌良秀大徳宗寿等齋食如例良秀大徳伝法護国論広惠和尚逆作破虎関和尚禪法十勝論者也携来加一覽可返遣之由報了

とあってこの時廬山寺の塔頭寺院に住していた良秀なる僧が「伝法護国論」なる書物を持って来るのであるが、この

本は古來著書並びに著作時不明の書物とされている。禪宗臨濟の虎関師鍊が鎌倉時代末期に「宗門十勝論」を著して禪宗が他宗より勝れている点十勝を挙げたがこれに対して天台宗より反論した書物とされているが、これを実隆は示導広恵の述作と記している。師鍊も示導も共に同時代の人であり、示導は貞和二年九月十一日に慈恩寺内の聖來庵で遷化⁽¹²⁾しているがこの貞和二年七月廿四日に師鍊は寂しているので同年の入滅である。辻善之助博士も日本仏教史の中で「宗門十勝論が出て間もない時に出た反論」と推定せられているので示導の著であるかもしれない。

示導に関係のある寺院としては今時の戦争迄は堺に天台宗寺院として存在していた「光明院」がある。泉州志に

光明院 浄土宗 櫛屋町東 昔在南莊

縁起曰福宝山不動寺光明院往昔桓武天皇夢中遇一老翁(中略)順徳院法宇浄土西山上人而以専修念仏勸化貴賤、後醍醐天皇勅為祈願所此時広恵和尚住職(下略)

とあって泉州志の記された元禄十三年には光明院は浄土宗であったのに、現在の堺市史第七卷第二編第二章に

光明院は福宝山と号し櫛屋町東四丁所在天台宗延暦寺末(中略)

順徳の朝証空上人中興し専修浄業四宗兼学の道場となり(中略)第五世康空(正平元年九月十一日寂)之を重興し嘉暦

三年後醍醐天皇勅願所に列せられ(下略)

とあってこの堺市史の調査の時には已に天台宗に変わっていた。是湛の「西山上人報恩鈔」には

総持ノ記曰⁽¹³⁾

西山第四世善恵上人国師之綸旨第八世広恵上人後醍醐天皇后醍醐之綸旨並在泉南光明院焼失、

とあるし、堺鑑(中巻)に

中世に於ける西山派教団(田辺隆邦)

光明院 四修兼覚ノ道場也、本寺洛陽西山三鉛寺

とあって、示導は国師号を頂戴していたのかもしれない。

(1) 信仰講和、大正七年刊関本諦承著

(2) 望月信亨博士の「浄土教之研究」の中「再び円頓戒の系統に就て」

(3) 新撰往生伝 並に 三鉛寺伝持次第

(4) 吾妻鏡 弘長三年十月廿六日

(上略)故奥州禪門第三年仏事於極楽寺被修之。以宗観房、為導師

とあって宇都宮蓮生の子泰綱が弘長元年十一月十一日に京洛で没してその三年忌を極楽寺で宗観を導師として敬修しているが、この宗観は証空の弟子であり北条義時の子朝時の名越一族で、有名な真言律の忍性がこの極楽寺に住する迄は、極楽律寺と称せられる以前は西山派の寺であった。

(5) 法水分流記には

証入―証源―漸空―仏観(観目)在鎌倉舞谷、とあり、浄土源流章図や蓮門宗派には、証入―観日―仏観(鎌倉)并谷寛空、とある

(6) 西山上人縁起

(7) 「国語国文」昭和三十六年六月号、承空上人 福田秀一

「金沢文庫研究」昭和三十五年十二月号、極楽寺多宝塔供養願文と極楽寺版瑜伽戒本(下) 桃 裕行

(8) 紫野の大徳寺の近傍にあった寺で淳和天皇の離宮で仁明天皇を経て常康親王に渡り僧正遍照に附属せられて元慶寺の別院となった。

(9) 山城名勝志 卷十一

念仏寺雲林院内

徳治三年勸進詞云勸進沙門願蓮敬白殊十方檀那の芳恩を蒙て雲林院の右雲林院は(下略)

(10) 西山上人縁起、新撰往生伝、

(11) 証空は戒と浄土は法然から学修し、

天台は磯長の願蓮房縁念に、又は慈円に真言は政春や仰木の公円に伝法受職する

(12) 紀州梶取の総持寺の記録

二 仁空置文と善空置文

本山義教団の変遷を述べるに当って各世代ごとの詳述の繁を省いて教団変遷上の意義ある点を中心として論じてみたい。

標題のように仁空置文は前述の示導の弟子「仁空実導上人円応和尚」の置文即ち遺言状であり、この仁空実導は示導を本山義開祖と見た時第三番目に三鈷寺に住した僧で、開祖証空滅後一四〇年目南北朝の末の至徳三年十一月廿五日に「西山上人縁起」を著した僧である(1)。その著述は膨大なものがあり(2)現在の西山教団では「戒念一味」の教義上、重要視していて本山義を大成した僧と認めている。

善空置文を残した善空恵篤上人円慈和尚は室町時代中期の明応元年八月九日八十一才で嵯峨の二尊院に於て寂した僧であるが、対社会的に大活躍した僧で西山教義を受容した公家社会に尊崇せられ当代後土御門天皇の戒師ともなり公家社会の第一人者であった三条西実隆から寂後も慕われた僧であった(3)。

三鈷寺伝持次第には

示導—示浄—実導—照恵—示観—中統—恵篤

と次第せられているから実導から四代後に三鈷寺に住した僧である。この時代の世相は応仁の大乱後の所謂戦国時代

であり価値観の顛倒した下剋上の物情混沌とした時に公家社会に本山義を通して「即便、当得」の二往生を標榜して西山教義を公家社会に宣布して「安心」を求めた善空の姿は本山義教団の最盛期であったと思われる（4）。

この二僧が共に置文を残してくれて現在吾々が見ることが出来るのは、当時の本山義教団の変遷を知る上で大きな意義を持っている。

仁空置文は

仍至徳二年乙丑六月五日更加添削重以記え畢老病比丘 仁空御判 七十七才

と自記しているし、善空置文は

文明十五年癸卯二月十五日 誌之

西山三鈔寺住持沙門 善空花押

とあるが、この至徳二年（二三八五）から文明十五年（一四八三）まで約百年を経ているのでこの間の事象を知ることができると共にその前後の変遷を類推する可能性を持っている。その上、他資料である公卿日記⁵は重要な裏付けとなる。本山義の大成者仁空実導は、師康空示導と同様に始めは天台僧であった。その自伝を西山上人縁起の末の所に抑貧道昔は叡岳の徒衆に列て顕密の修学に携といへど

とあって顕密から学習して嘉暦二年に十九才の時に師康空示導が大原来迎院に住していた時に相逢ひ翌年四月に円頓一実の妙戒をうけて、この嘉暦三年十一月に示導が西山三鈔寺に入寺する時に一緒に来たようである。その後十五年、三十五頃の時に師示導の示寂まで円密戒浄四宗の学修が行われたと思われる。仁空の著書の中には台密の著として有名な「大日経義积搜决鈔や遮那業案立草」があり、指掌鈔や円戒晧示鈔のような円頓戒についての著があって円

戒並びに台密方面まで学修のできた僧であったので、南北朝初期にはかなり有名な僧にまで成長なさっていたと思われる。その結果末年には京洛廬山寺の一代となったのである。仁空置文の中に

城北廬山寺事

とあって廬山寺は住心覚愉が洛北出雲路に廬山なる寺を鎌倉時代中頃の嵯峨天皇の御代に創建し第二世となつてゐる本光禪仙が北小路に草菴を結んで法輻を開いていたのを第三世となつてゐる明導照源が両方を合併して一ヶ寺とした。この明導照源は康空示導の弟子であつて実導には法兄にあたる。この明導照源が(6) 応安元年に寂した時に実導は六十才位で三鉢寺の住職であつて、京洛仏教界に於ては一流人物と認められてゐるし、しかも法系からは明導照源の弟となると廬山寺の後住となるのは自然の勢であつた。かくて西山本山義の住職仁空実導が天台宗寺院の廬山寺第四世として六十才位で住名を持ったのである。

仁空彼遺属住持七八廻、於其中間雖有回祿事

とあって七、八年程住名を持っていたがその中間に火災に逢つてゐる。その上病身で「老屈廻喉」で交衆共住の儀は堪え忍び難いので、師康空の遺弟であり寂後は明導照源の弟子となり更に実導の弟子となつた澄空恵達に住持職を天授二年十月廿二日に譲つてゐる(7)。この時は六十八才位の老令である。しかるにこの澄空恵達は廬山寺に八年間住名を持つていて至徳二年十二月四日に寂するが(8) 恵達は実導の再住を願つて遺言しておいたので、致し方なく廬山寺を再び続くことになり三年を経て嘉慶二年十一月十一日八十才で三鉢寺に入滅するのである(9)。

このように仁空実導は西山で有名な本山義の大成者であると共に天台教団でも台密円戒方面の権威者として有名な僧であつた。この後三鉢寺は置文の通りに実導の法兄示観の弟子什空照恵が次ぎ、廬山寺の方はこれ又実導が予測した

ように明空志玉が次ぎ無相惠鏡を経て弁空示鏡が次ぐが、この弁空示鏡は実導の法兄で三鈇寺の前住であった澄空示浄の弟子であり示浄の寂後実導について受戒灌頂をし聞法研精しているので三鈇寺の什空照恵が応永七年に寂した後に三鈇寺をつぎ八年後に無相惠鏡が応永十五年に寂すると廬山寺も兼務するのである⁽¹⁰⁾善空置文の二尊院の条下に

先師示鏡和尚伝持以来、為西山末寺始而所学教院之規式也

とあって嵯峨の二尊院も三鈇寺の末寺となり示鏡は兼務するのである。法然門下の正信房湛空の二尊院は法水分流記に嵯峨門徒と称せられているが前任第十世の僧令が応永廿二年に没して以後第十一世として示鏡が兼務し文安五年（二四四八）一月十五日に寂するまで実導の系統が廬山寺に住職した。この間、八十年は西山三鈇寺と密接な関係寺院であったがこれは後まで続いて善空惠篤の宮廷で活躍した文明年間には宮廷公家の法要儀式には三鈇寺二尊院廬山寺と証空の建立した遣迎院が出仕して厳修している。

(1) 国文東方仏教叢書 伝記上、

(2) 指掌鈔（永徳記とも菩薩戒義記聞書ともいわれる）（西山全書別巻第三）

弘深抄（西山全書別巻第一）

大日經義釈搜決鈔、遮那業案立草、髻珠抄、西山上人縁起、仁空置文、西山古式座右鈔、論義鈔、希聞鈔、新学菩薩行要鈔、円頓戒曉示鈔、不動立印鈔、金剛立印鈔、胎処立印鈔、梵網經直談、初心行護鈔、円頓戒秘聞書（西山全書別巻第三）以上の他にまだ教著ある。

(3) 龍谷史壇六十四号、「実隆公記に現われた西山教団」西山学报二十二号、善空上人の教化拙論

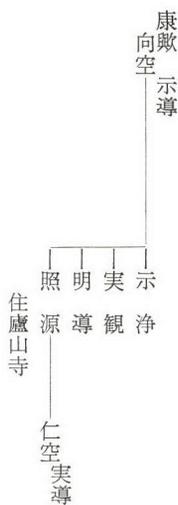
(4) 文明八年九月二日の実隆公記（如法念仏仮名日記）

（上略）弥、即便住生のうたかひなき身とも成ぬる心ちして随喜のおもひおさへかたく（下略）とある。

(5) 親長卿記、実隆公記、宣胤卿記、

(6) ①本朝高僧伝 卷十六 京兆廬山寺沙門照源伝、

②法水分流記は永和四年静見勸録で実導の存命中であるがこの中に、



(7) 廬山寺文書(大日本史料)

(8) 廬山寺歴代記

(9)(10) 三站寺住持次第及び廬山寺歴代記

三 本末関係の先蹤

教团组织の中に本末関係が歴然と出来たのは徳川幕府の統制上初期に出された「寺院法度」からとせられているが、これとは内容は異なるが仁空置文の中に

一、多賀 西生寺事

沙弥觀阿驚多賀大明神之靈告、勸進諸人所令建立也。而神官等相議令寄属仁_ニ訖。

当寺西山末寺之上、宝寿寺近处有其便者(下略)

とあって「西山末寺」と明記されていてこの南北朝の至徳年間に本寺、末寺の本末関係の意識が已に仁空に強くて法

を思ひ次代を憂う至情から三鈷寺を本寺と見立て末寺として京洛には証空建立の歆喜心院、遣迎院、撰津生瀬の淨橋寺を始め江州に前述の多賀の西生寺、原田の宝寿寺その他箕浦の西園寺、岩脇の護念院、平方の本光寺、国友の長修寺等近江に主として本山義の末寺が分布されていたようである。この後百年を経て室町時代の善空惠篤の時代になると嵯峨の二尊院も前述のように三鈷寺の末寺となり善空置文には、近江州には三ヶ寺、播州志賀磨律に光明寺備前に七ヶ寺、周坊に三ヶ寺、長門に二ヶ寺備中に法明寺等当時の末寺三十四ヶ寺を挙げている。このように室町時代の文明年間には本山義教団の教線は京洛を基盤として近江から撰律播磨備前備中周坊長門へと瀬戸内山陽道を下関の赤間関まで張っていたようである仁空が我が身一つで三鈷寺廬山寺並に諸末寺の住名を持ち、末寺には「看房主」を置いて監理していく本末関係の制度は一般世相の混乱した時には一層強化されて行く。政治の中心地の京洛から遠く離れた田舎寺院は自衛的手段として戦国大名の台頭した室町末期には本寺に依頼して、その権威と実力によって自坊を守ったようである。奈良の興福寺僧兵の「六方組織」も同様な線があったと思われるがそれを興福寺が利用したのであろう。

結

この時点では西山嵯峨義教団は已に滅亡していて善空は二尊院塔頭に淨金剛院を再建している(1)ので本山義に没入し、東山義は京洛に三福寺があるがその特色は失せて室町時代には深草教団に没入していく(2)。深草教団は深草に真宗院、京洛に円福寺があるが南北朝時代には大和に栄え、「法水分流記」によれば、蔵福寺、三光院、来迎寺、真宗寺、戒長寺の五ヶ寺をあげられるが室町末期には誓願寺が台頭し、尾張三河方面に徳川氏の擁護を得て教団の発

展をとげる(3)六角義は美濃に立政寺があつて南北朝時代に知通なる法器を得て(4)同国に栄え、西谷義教団は東山に禅林寺永観堂があり室町末期の天文二年に禅林寺の舜叔宏善が宮廷で観経三輩観を三日間講じるし(実隆公記)京洛仏陀寺の億空妙諫(邦諫)が文明九年三月十三日から宮廷で活躍するが、この二僧は共に西谷派の僧であるので(浄土承継譜)粟生の光明寺と禅林寺が夫々西谷義の本寺となつて行くようである。

- (1) 実隆公記延徳元年八月廿六日
- (2) 龍谷史壇六十四号 拙論参照
- (3) 「深草」十五号、十六号、十七号誓願寺発行拙論(山科言継と深草教団)参照
- (4) 大日本史料元中八年五月十八日

